学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２１年６月８日
文責：ＪＵＮ

学びの深まりは、夢中と没頭から

１　オンライン例会において

６月の例会は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言・まん延防止等重点措置の再延長ということから、完全オンラインでの開催となりました。会場における例会が行えないということはとても残念なことでした。しかし、詩の授業における中学３年の生徒の読み味わいと、それを引きだした「自分の感受性くらい」という詩の力、そして生徒と詩を切り結ぶ授業をしたＫ先生の存在に心打たれる時間となりました。さらに、その後聴かせていただいた新潟大学教職大学院准教授一柳智紀先生のお話は、参観した授業の中の学びの事実、子どもの事実に、どれほどの深さと可能性があるのかがあふれていて、私たちは大きな感動に包まれました。

授業報告と講演から、参加者はそれぞれに大きな学びをすることとなったのですが、私は、その二つを通じて、学びで最も大切なのは、どう授業するかという教師の指導法ではなく、学ぶ子どもの事実に存在するのだ、そしてそれは、学びに対する「夢中と没頭」という子どもの姿に現れるのだと学ぶこととなりました。

「自分の感受性くらい」という詩を「しぶい味」だと感じた生徒がいました。その生徒が、詩を読むことによって、渋さとか苦さを感じているのですが、その味は、詩に書かれていることを自らのこととして受け止め、自らを見つめたことによって感じられてきたものにちがいありませんでした。子どもが目にしているのは、文字の連なりでしかない印刷物です。けれども、「読む」という行為において、それは単なる文字の連なりではなくなるのです。そのとき、子どもに生まれているのは、まさに「夢中と没頭」なのではないでしょうか。

今回の実践報告にあたり、Ｋ先生は、卒業した生徒と連絡をとったそうです。そのとき、生徒は即座に、この詩のこと、その詩から自分が味わったことを思い出したのだそうです。それは、あのとき子どもたちが、味わうことに自分を入れ込んでいたことを表していると思われました。

一柳先生の講演で目にした二つの映像が、今もくっきり脳裏に残っています。一つは、理科の授業で、湧き上ってきた探究心によって夢中になって実験し思考し学び合う子どもたちの姿でした。一柳先生はおっしゃいました、それは、子どもたちが実験の「結果」だけに注目しているのではなく「科学することを学ぼうとしている」からだと。それは、まさに「夢中と没頭」によって生まれる学ぶ子どもの姿でした。

もう一つの映像、それは、一人の子どものノートでした。学級が始まった頃は、ほとんど何も書かれていない真っ白なままのノート、それが、ノート一面にびっしり書かれるようになる、し

かも、そこに書かれていたのは、その子どもの「心の表白」であり、心からの「学び喜び」でした。子どもが学びに「夢中と没頭」をするようになることで、これほどまでの変化を起こすのだということを、私は目の当たりにしたと思いました。そして、子どもの学ぶ意欲・学ぶ態度は、型に従わせるとか、規律を設けて守らせるとかいうことでは決してなく、ひとえに、学ぶことの素敵さと喜びが感じられるような授業を教師が実現することによって生まれるということを、ひしひしと感じさせられたのでした。授業をしている教師ではない一柳先生が、その時間だけの出来事ではない、一人の子どものノートの変化にこれほどまでに心を傾けられたという事実は、いつも授業をする教師にはショックであるとともに、こうでなければという憧れのような思いをもたらしたことでしょう。

２　「共有の課題」「ジャンプの課題」とは

さて、ここで考えてみたいのは、子どもたちに「夢中と没頭」を生み出すために、必要不可欠なものは何なのかということです。どのようにしたらよいのかという方法論ではなく、何が必要なのかと考えてみたいのです。

それは、何を学ぶかという「学びの課題」のありようと、安心して学ぶための「聴き合う関係」なのではないでしょうか。「課題」に魅力がなければ夢中になどなれるはずがありません。また、それだけの内容を有した「課題」であっても、教師の提示の仕方が悪いと、子どもの意欲は減退していきます。よい「課題」が、取り組みたくなる思いを掻き立てるように提示されたとき、それだけで子どもの「夢中と没頭」は生まれます。

ただ、そうした「課題」は、少し考えればわかるような易しいものではありません。できそうでできない、そういう時に子どもたちは知らず知らず夢中になります。しかし、それも一人ではそういう意欲は削がれてしまいます。自分の周りに、自分と同じように夢中になって取り組もうとしている仲間がいる、その仲間と「聴き合い考え合い支え合い寄り添い合う」ことができる、そういう環境がどうしても必要なのです。子どもたちは、その環境があることで、どんなにわからなくても、どんなに自信がなくても、安心して学びに入っていけるのです。

そのうち、まず、「課題」について考えてみることにしましょう。

１単位時間（小学校 45 分、中学校 50 分）を「共有の課題」、「ジャンプの課題」という二つの課題で構成するという授業は、佐藤学先生（学習院大学特任教授）によって、「協同的学び」のあり方として示されたものです。

私がこの二つの用語を知ったのはかなり前のことですが、そのとき真っ先に考えたのは、「共有」「ジャンプ」と名づけられた意味でした。

「共有」とは「共同で所有すること」（岩波国語辞典）です。ということは、この課題は、学級のすべての子どもの理解を子どもたちの共同作業によって目指すものだということになります。そして、その学習題材は、基礎的なもの、つまり教科書レベルのものになります。

共同作業ということはグループやペアによる協同的学びのことです。とは言っても、グループやペアで一つの答えを見つけるために行うのではありません。「共同で所有する」の「所有」は一人ひとりにおいて行われるものです。それを「共同で」とは、一人ひとりの学びを寄り添い合い

支え合いによって学ぶということです。つまり「共有の課題」の学び方は、個別の一人学びではなく、グループにおける単なる話し合いでもなく、グループやペアのみんなが理解できるように「協同的に」学ぶ学びだということになります。

一方、「ジャンプの課題」の「ジャンプ」は「跳躍」という意味です。陸上競技の場合、高さを目指す跳躍は「高跳び」であり、距離を伸ばすものは「幅跳び」です。どちらも、自分の限界を伸ばそうと頑張って跳躍するという運動種目です。それを学習の比喩として表しているということは、すっとできる程度の学びではなく、そのときどきの理解の限界を超えようと取り組む学びだということになります。ということは、その課題は、少し考えれば理解できるものではありません。また、どれだけ頑張ってジャンプしても到達できそうもないものでもありません。ジャンプして到達できる可能性のあるレベルのものだということになります。

豊かな学びが実現しているとき、子どもは夢中になっています。没頭しているとも言えます。「ジャンプの課題」における学びは、すぐにはできない内容だけど、「わかりたい」「できたい」と思い、今はできないけど取り組んだらきっとできると感じて取り組む学びです。だから夢中になるのです。そういうとき、子どもたちは無口になります。課題と対話し、自分自身と対話しているからです。逆に、簡単な課題だと饒舌になります。よそ事のおしゃべりを始めたりします。それでは学びは深まりません。つまり学びを深めるために「ジャンプの課題」は欠かせないものなのです。

ただ、無口とは言っても子ども相互の言葉の行き交いは大切です。すべての子どもの取組を実現させるためには、寄り添い支え合う子ども相互のかかわりと対話が欠かせないからです。やや難しい目の「ジャンプの課題」にすべての子どもが取り組むために協同的学びは必須です。ですから、協同的に学び合える子どもの関係性の育ちなくして「ジャンプの課題の学び」はあり得ません。

「共有の課題」、「ジャンプの課題」とはどういうものかについては、以上のようなものなのですが、そのことがわかったとしても、いざ授業となると、多くの教師は、どういう課題にするべきか、悩んでいます。それは、どういうものなら「ジャンプ」というレベルなのか、その判断がその教科・題材の見識がなければできないからです。そういう意味では、悩みは当然のことであり、おおいに悩んで「ジャンプ」の授業づくりに取り組んでいく、それが授業をつくる楽しさなのではないでしょうか。

３　「聴き合うかかわり」を育てる

すべての子どもが安心して学べるようにするために、なんとしても必要なのは「話し合い」ではありません、「聴き合い」です。

「話し合い」というイメージが強いと、「話すこと」に意識が向きます。そうすると、よくわかっている子ども、しゃべりたがり屋の子どもがすぐしゃべり出す傾向が強くなります。そして、そういう子どもほど、「言いたい」という思いが先行し「聴く」ことが疎かになります。「よく聴く子どもがよく学ぶ子ども」と言われるように、「聴く」ことと「学ぶ」ことは直結しています。しゃべるだけの子どもは、自分の考えに固執したり、自分の考えの域から出ようとしなかったりする傾向があります。

大切なのは、「差異」「異なり」に耳を傾け、そこから「自分自身と対話し、課題と対話する」ことによって、よりよいもの、より深いものを探ろうという学び方です。だから、「対話的学び」は「聴き合い」でなければならないのです。そのことは、一柳先生の講演においても、大切なこととして語っていただいていました。

ただ、、例会のブレイクアウトルームにおいて、「聴き合える」学級に育てていくことの難しさが参加された何人かの方から出されていました。それは、その先生の指導力がどうのこうのということではなく、それほどまでに「聴く」ことが大切にされない生活を子どもたちが送っていることに起因しているのだと思うのです。もちろん、学校教育においても、「聴く」ことに十分な重きを置いてこなかったのだとも言えます。

けれども、「聴き合う学級」「聴き合える子ども」にしなければ、学びは豊かなものにはなりません。ですから、私たち教師は、腹をくくって、どれだけ難しいことであっても、子どもの心と意識に「聴くこと」の大切さと喜びを培っていかなければならないのです。それは、自分が担任している今のことだけでそうするわけではありません。子どもたちのこれからのためにも、そして子どもたちが生きていくこれからの社会のためにも、取り組まなければならないのです。

教師ができそうにないと諦めてしまったら、それで万事休すです。

諦めず取り組むために必要なこと、それは、「聴く気はないんだけど」「聴くってどうすることかわからないし」「私、聴いてもらってうれしかったって思ったことないし」「聴いたからって何になるの？」などという子どもの現実の思いを受けとめることから始めるしかありません。そして、そういう子どもの心に響くような、そして、はっきりわかる結果を出せる「小さな手立て」を打っていくことです。もちろん、その「小さな手立て」は次第に深いものにチェンジしていくことになります。そこには「見通し」が必要です。バラバラになっている子どもの関係、聴く気持ちの薄い子どもの状態の中に、一つひとつ投げかけていくのですが、そういう実践に対しては毅然として覚悟をもって対処しなければならないでしょう。しかし、子どもに対しては、どこまでも温かく接していかなければなりません。私は「小さな手立て」と述べました。とるに足らないような「手立て」で少しだけよくなっただけ、なんて思わずに、小さな進展を子どもとともに喜び、そのように実行した子どもを褒めなければなりません。「聴く」ということも「学ぶ」ということも、子どもが自らの意思で行ったときよいものになるからです。

一柳先生は、教育は子どもたちに「生きる喜びと希望」をもたせるためのものだというようなことを話されました。そして、そのために「気持ち（wish)」「何（something)」「実現（come true)」「行動（action)」の四つが必要だと話されました。これは子どもにも必要ですが、子どもの前に教師こそ、「気持ち」をしっかりもって、「何」をすべきか熟考し、「実現」に向けて、諦めず「行動」しなければならないのですね。

「聴き合う学級」を育て、子どもたちの「夢中と没頭」を生み出すために。

＝＝　２つのお知らせ　＝＝

◎　石井順治著『続・「対話的学び」をつくる～聴き合いと ICT の往還が生む豊かな授業』（ぎょうせい）
７月初旬に刊行。購読希望の方に栞付きでお送りします。（後日、案内します）

◎　「第 22 回授業づくり・学校づくりセミナー」受付開始７月１日（６月下旬に案内要項郵送）